

ドバイ・アブダビ 経済視察報告書

平成30年度の国際交流委員会(古下義隆委員長)の海外視察は8月22日から27日の4泊6日で実施され、総勢29名の方にご参加頂きました。



バージュカリファからドバイ市内を展望



ジュメイラ・モスク



ジュメイラ・ビーチとブルジュ・アル・アラブ

国際交流委員会では、毎年恒例の海外視察を実施致しました。今年の視察先はアラブ首長国連邦のドバイとアブダビです。

8月22日、関西国際空港に於いて岸脇名誉会頭に見送られ結団式を行い、23時45分のエミレーツ航空でドバイ国際空港に向けて山本会頭を団長として総勢29人で出発しました。

ドバイ国際空港に着いたのは、現地時間で朝の5時という事でホテルのレストランで朝食を取り、休憩をしてからスクークと呼ばれる地元の市場を視察しました。スクークに行くのにアラブ船という庶民の足になっている古船に乗り、運河(クリーク)を渡りました。スクークとはオールドドバイに位置し、「海のシルクロード」の中継貿易港として栄えてきた青空市場のことです、まばゆい光を放つゴールド・スークと香辛料を扱う店が連なるスパイス・スークを訪れました。ゴールド・スークはその日の金の相場により値段が違うが、政府により品質が保証されているので安心して購入することが出来るとのことです。スパイス・スークでは、日本で高価なサフランやドライタマトやドライレモンといった日本では見たことのないスパイスが何百種類と並べられており、独特の香りが漂っていました。

一行は、オールドドバイを後にして世界一が集まる最先端スポットのダウンタウン・ドバイに向かいました。この地域は前代未聞の巨大プロジェクトを実現させてきたドバイの中でも勢いのある新興地区で、空港から片道わずか20分のエリアで湖を囲むように半径600m圏内に商業施設やホテルが建てられています。2010年に誕生した全高828mのバージュ・カリファはまさしく世界一高い超高層ビルでオフィス・居住区・アルマードのホテルなどが入っています。124階と125階にある展望台からはドバイの全体の街並みが見渡せ、他では見る事の出来ない眺望が楽しめました。

アラビックビュッフェで昼食を取った後、少し早めに滞在ホテルであるリッピカールトンにチェックインし、長旅の疲れを癒しました。夕食の後、今度は世界最大の噴水ショーである「ドバイ・ファウンテン」を視察しました。この噴水ショーは世界一といふだけ規模や迫力が桁違いでいます。5つのサークルとそれを繋ぐように弧を描く275mの長さの噴水装置からビルの45階に相当する高さ(140m)の噴水が放たれます。放された噴水は6,600個の電球と25色のプロジェクターにより光が全て、幻想的な空間を作ります。設計したのはラスベガスの「ベラージオ」の噴水を作った人と同じだそうです。そしてバックに流れる曲は、アラブの古典的な曲からマイケルジャクソンの「スリラー」まで全35曲がラインナップされ、音楽のリズムに合わせて噴水が描く光と水の表現が変わります。当日は休日ともあって大勢の人が鑑賞していました。

3日目はドバイ・メトロの乗車を体験しました。ドバイメトロは総延長距離が74.6kmで世界最長の無人運転で政府によって営業されています。車両は日本の近畿車両で18mの5両編成で、線路は三菱商事や大林組・鹿島などの協業により8月2009年に完成しました。我々はエミレーツタワー駅からブルジュア駅までわずか4駅でしたが乗車し、ドバイ市民の足となっているメトロを体験しました。ちなみに料金は1ブルックだったのです日本円で約70円程度でした。

次に視察したのはジュメイラビーチです。パームアイランドの入口にあるジュメイラビーチにはドバイを象徴する超高层ホテルが建ち並び七つ星といわれているブルジュ・アル・アラブを視察しました。まず驚くのがその立地です。台風や津波などの自然災害の多い日本の感覚からするととても信じられない。ブルジュ・アル・アラブはジュメイラビーチ沖合280mの人口島に誇らしげにそびえ立っています。「アラビアン・タワー(アラブの塔)」という意味のこのホテル、まさにドバイを代表する建物と言えるでしょう。しかもエッフェル塔よりも高い地上321mは、ホテル建造物としては世界最高峰。アラビア帆船をイメージした優雅な外観を持ち、そのまま華麗さと格の高さから「七つ星ホテル」と呼ばれています。

次にジュメイラモスクを視察しました。ジュメイラモスクは、ファーティマ朝時代の様式で建てられたイスラム教の礼拝堂で、約1200人が同時に礼拝できる規模です。1976年に建設が始められ、1979年に完成しました。中央の大ドームと2本のミナレットが特徴的な、ドバイで最も美しいモスクの一つと言われています。その日の夕方は、デザート・サファリと言つて砂漠の中を4WDの車に乗つて走り、オアシスでアラブの踊りや民族衣装を着たり、地元の文化に触れたりしました。アラブ人の多くが吸っていた地元の水タバコに興味があり吸つてみました。が、独特的の香りがしました。

4日目は、ドバイを離れて隣の首長国であるアブダビにバスで移動しました。「アラビアの宝石」ともいえるUAEの首都アブダビへは160kmもあり、高速道路で2時間かかりました。アブダビに着いて、まず最初に視察したのはループル美術館アブダビでした。この美術館は、フランスパリのループル美術館の別館ではなく、UAEとフランス両国が協働した国家プロジェクトによって建設されたものです。UAEからフランスに対する支払総額は10億ユーロ(約1300億円)にのぼるとのことで、「ループル」の名を30年間冠する対価として4億ユーロ(530億円)支払うということです。さすが石油で莫大な富を持つた国だけあって、すごい金額です。設計は日本の汐留の電通本社ビルなども手掛けたフランス人建築家ジヤン・ヌーヴェルで、エメラルドブルーの海に囲まれた10万m²の場所に浮かぶ、計55塔の白い



ドバイショッピングモール



シェイク・ザイード・グランドモスク



結団式 岸脇名誉会頭 挨拶



ナキール社を視察

建物を覆う網目状のドーム 자체がとても印象的でした。展示物は古代エジプトから日本の屏風まで多種多様です。最も有名なのがレオナルド・ダヴィンチの「ミラノの貴婦人の肖像」やゴッホの自画像そして圧巻だったのが、「アルプスを越えるナポレオン」で、どれもが教科書に出てくる作品ばかりです。しかも厳重な警備などなく手でさわれる様な場所に展示してあったので、本当に驚かされました。

一行は昼食を取った後、2班に分かれ視察を行いました。1班は世界一豪華と称される「シェイクザイードグランドモスク」を視察し、2班は「フェラーリワールド」を視察しました。

1班のモスクは、アブダビの父として愛された初代大統領の故シェイク・ザイード・ビン・スルタン・アル・ナハヤンから名付けられたモスクであり、国家的なランドマークです。地元の人からはグランドモスクと呼ばれ親しまれ信仰を集めているが、一般観光客の見学ツアーも受け入れています。しかし、ドレスコードやモスク内でのマナーがとても厳しかったです。

一方、フェラーリワールドはイタリアのフェラーリ社が造った公式のテーマパークであり、入場料が約1万円とかなり高かったです。なんといってもこのテーマパークの目玉は時速240kmで加速するジェットコースターで、スバル世界最速といわれています。名前は「フォーミュラ・ロッサ」と呼ばれています。スタートから5秒以内に240kmに到達するとの事で、ジェット戦闘機と同じ油圧ワインチシステムを採用することで実現できたそうです。体がむき出しの状態で時速240kmが体感できるアトラクションはこのフォーミュラ・ロッサが世界初で体にかかる重力加速度は今までに体験したことのない衝撃でまるで、F1レーサーになつたかのような感覚を味わうことが出来ました。ジェットコースターの好きな人は2度チャレンジをしていました。

1班と2班はそれぞれ貴重な体験をして一路ドバイに戻り、夕食は久々の日本料理を頂きました。

5日目は今回のメインの視察先であるナキール社を視察しました。ナキール社とはドバイを拠点とする政府系不動産デベロッパーで、中東最大級の規模の会社です。「ナキール」とはアラビア語で「バームヤシ」を意味します。「海のナキール」と呼ばれ、人口島・超高層ビル・複合商業施設・大規模娯楽施設など数千億円から兆単位の建設物件をいくつも保有しています。中でも最も有名なのがパームアイランドです。ヤシの木を模した世界で最大の人口島で観光資源を目的として建設され、100以上の高級ホテルと1400戸以上の別荘そして商業エリアから成る一大リゾート地です。この人口島によってドバイの海岸線は520km長くなつたといわれ、日本の多くの企業が建設に携わったと言われています。又、ワールドという人口島もナキール社の有名な開発の一つ

です。このワールドは文字のことく世界地図を型どった人口島で、それぞれ国名がついています。ドバイ首長は2003年にプロジェクトが計画されました。島の00島以上からなる人口島は、140億ドル(1兆5千億円)の莫大な資金が投入され建設されました。島の価値も50億から100億といわれ、ナキール社からオファー無いと購入できないそうです。ちなみに島への交通手段はヘリコプター・水上バイク・船しかなく、いずれにしてもお金がかかります。実際の購入者にプラッド・ピット、アンジェリーナ・ジョリー夫妻や、ロッド・スチュワート、ミハエル・シューマッハなどの世界のセレブが購入しているらしいです。

一行はナキール社のレセプションホールに案内され、ビデオを見ながら説明を聞きました。その後は、パームアイランドの模型の前で集合写真を撮り視察を終了しました。その日の昼からは世界最大といわれているドバイモールを視察しました。ドバイモールは2008年に完成し、総面積111.5万m²、屋内フロア約55万m²で店舗は1200店が入店し、水族館やスケートリンク、22のスクリーンを持つ映画館、そして日本の紀伊國屋書店や無印良品、そしてダイソーも出店していました。東京ドーム23個分とあって、1日中かけても回りきれない広さに世界中の観光客が集まり、とても賑わっていました。しかし、物価がとても高く中々手が出せなかつたのが現状です。日中は40度以上にもなるので屋内で過ごし、夕方にドバイのクルーズに行きました。昔ながらのアラブの伝統的なダウ船と呼ばれる木造の船に乗り、ドバイのクリークの静かな水面をゆっくりと進みながら、急成長を遂げたドバイの街並みを眺めるのもとてもオツなものでした。早いものでドバイの視察も今日が最後といふ事でホテルに戻り、さよならパーティーを開催しました。ホテルの一室を貸切り、各自より今回のドバイ・アブダビ視察の感想を述べて頂きました。そしてその日の深夜エミレーツ航空にてドバイを出発し、全員無事に関空に着いたのは、夕方の6時でした。

今年の国際交流委員会のドバイ視察で一番感じたことは、1950年代のドバイの航空写真を見たとき、周りが砂漠で海岸沿いに漁村がある位の貧しい国が石油の採掘によってわずか50~60年余りで世界一を数々誇る大金持ちの国に発展する凄さを体験出来た事です。

しかし、ドバイはもう石油が出なくなつて来ていると言われています。1966年ドバイで石油が発見され、莫大な資金を手に入れ、その資金で今までに多くのインフラを整備し、観光施設を作り、世界中の観光客を集めることで、外貨を稼ぐ仕組みを見事に作り上げた国であります。

日本もこれから、観光立国を目指すのであれば、「世界ナンバー1」「世界で唯一」のコンセプトを具体化していく必要があると思いました。



ルーブル美術館 アブダビ

ゴッホの自画像

ナポレオンの写真

ドバイ・メトロ

サファリ

スバイス・スク

ゴールド・スク

バージュ・カリファ